

◇津軽音頭

江戸時代、津軽藩は津軽五都からなっていた。東・西・南・北・中津軽である。5月末、西津軽を旅した。

能代から日本海に沿って白神山地を越え、十二湖・千畳敷・鱒ヶ沢・木造まで足を伸ばして見た。

十二湖は青池のコバルトブルー、千畳敷は広い平らな岩場が素晴らしい観光名所である。今回の旅の目的である鱒ヶ沢と木造は津軽民謡にちなんだ町である。

○岩木お山はよい姿
津軽娘は見て育つ○西の鱒ヶ沢の茶屋のな
茶屋の娘は蛇の姿

鱒ヶ沢は江戸時代、津軽藩の奉行所が置かれた所である。その頃、津軽藩は米の増産を図るため、近在の若者を集め木造地区の開拓事業をしていた。この若者達は夜になると、鱒ヶ沢の茶屋で酒を飲み、酔いつぶれて次の日は仕事にならない。

奉行所役人は一計を案じ、茶屋に張り子の蛇を作り、茶屋の娘は大蛇であると噂を流した。この計が功を奏し茶屋に出入りする若者が居なくなった。その後開拓事業は順調に進んだ。当時開拓されたこの地区は、現在は木造町として青森県の米処となっている。

張り子の蛇は、その後の「ねぶた祭」に大きく影響を与えたと私は思う。開拓事業が終わった時、盛大な祭りが行なわれ、張り子も参加したであろうと想像出来るからである。いろいろ昔の事に思いをはせる楽しい旅であった。

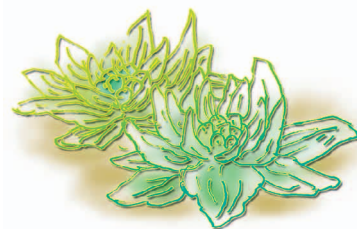
ちなみに津軽音頭は秋田節と言われていたらしい。秋田坊と言う人が津軽地方を廻り唄っていたことから、秋田節と言われていたが成田雲竹が、津軽の唄なのに秋田節と言うのはちょっとおかしいと、秋田の鳥居森鈴に相談し、秋田では唄われていない事を確認し津軽音頭と命名したと師匠から聞いた。

◇源将・平姫の悲恋 稗つき節

約800年前の世の中、源氏と平氏による覇権を掛けての争いも、平氏の敗色濃厚となりつつあった時期である。源氏の将・那須の大八と、平氏の姫・鶴富姫との許されざる悲恋の物語が宮崎県椎葉村に民謡として今に伝わっている。

○庭のさんしゅうの木 鳴る鈴掛けて ヨーオーホイ
鈴の鳴る時や出ておじゃれヨ○鈴の鳴る時や 何と言うて出ましょ ヨーオーホイ
駒に水くりよと 言うて出ましょヨ○お前や平家の 公達ながれ ヨーオーホイ
おどま追悼の 那須の末ヨ○那須の大八 鶴富捨てて ヨーオーホイ
権葉発つ時や 目に涙ヨ

人目を忍び逢瀬を重ねる二人だが、この恋が源平の争いと言う当時の世情からして許されるはずもなく、いずれ離別が訪れる事を理解していた。なんとも悲しく切ない恋である。歌詞から会う時の合図や、愛瀬の会話、姫が今にも玄関から出て来そうなようす。恋する女への思いを断ち切る男のようす等がリアルに、しかも切切と唄われている。哀調を帯びた尺八と三味線が更にこの曲を引き立てる。この歌も文化遺産の資格は十分である。



土地売却や等価交換、建物老朽化による建替え等、土地有効利用をお考えの方は一度ご相談ください。



TOSHIN GROUP SINCE1963

東神興業株式会社

一般社団法人全国住宅産業協会会員／東京都不動産のれん会会員

取締役 夏井 雅樹 (昭和58年機械科卒)

〒167-0043 東京都杉並区上荻1-23-19 東神荻窪ビル5F

TEL.03-5335-6861 FAX.03-5335-6860

URL <http://www.toshin-grp.co.jp>

E-mail m-natsui@toshin-grp.co.jp